一九五九年の県政を回顧す

1959年の県政ビッグテン

1、本県産米二百万石突破す
2、仙人有料道路の開通
3、精薄施設みたけ学園の開園
4、徳田橋の着工
5、岩手総合職業訓練所の建設
6、雫石川農業水利事業国営として決定す
7、北上川中流部河川改修の着工
8、岩手放送テレビ局の開設
9、大釜崎ロラン局の開設
10、岩手大学に応用化学科設置

本県産米三十万トン突破をはじめ、仙人有料道路の開通、岩手放送テレビ局の開局、また四月から六月にかけて、矢つぎ早やに行われた各種選挙など、数々の話題と県勢進展上特筆すべき多くの実績を残して、一九五九年も、いま暮れようとしている。

こうした一九五九年の県政を回顧する意味をも含めて、例年のように、県政ビッグ・テンが選出された。

(1) 本県産米 二百万石突破す

県産米が多年の念願であつた二百万石（三十万トン）という大台を遂に突破した五、六年前までは、農業関係者でさえも、想像しなかつたことだけに、その喜びは、ひとしお大きなものがある。

二百一万四千七百石（三十万二千二百トン）という画期的な産米実績をあげるに至るまでの推移を、正確な数字の発表されている昭和二十四年からについて見ると、まず反収では、昭和二十四年に二石一斗二升三合（三一八・四五kg）であつたものが、空前の豊作といわれた昭和三十年には二石七斗七升八合（四一六・七kg）であり、今年は反収では、それに及ばないとしてもそれに次ぐ二石七斗（四〇五kg）という実績をあげた。

一方作付面積を見ると昭和二十四年には六万二千四百九十㌶であつたものが、昭和三十四年には七万四千六百㌶と約一万二千百㌶増となつている。

この増加の原因は、大規模土地改良事業の推進によつて、開田が進むと同時に用排水利の便等が改善され、その年によつては、作付不能となる水田が出ていたものが全く解消されてきていることなどが大きな原因となつている。

さて、二百万石（三十万トン）という大台を突破して二百一万四千七百石（三十万二千二百トン）という収量をあげ得たが稲の豊凶に最も影響を及ぼす気象条件はどうであつたかを見ると、

苗代期である四月は全般的に良好な気象であつて、最低気温が平年より摂氏二・八度、また平均気温は摂氏二・一度それぞれ高く経過し日照時間も一一二・三%ということで高温多照のうちにすぎた。

五月に入つてからは、四月よりも気温は低下し、最高気温も平年より低い時期が多くなつたが月平均で見ると最高で摂氏一・三度、平均気温で〇・九度高く日照時間は一二二%と、大体四月同様高温多照に経過した。

特に中下旬は雨量が少なかつた。このように苗代期は順調で苗の成育も良く、また病虫害も少なかつたが、六月以降は苗代期の順調な気象条件にひきかえ、七月の五日～十日、二十日～二十五日、八月の十日～十五日を除く二ヵ月余り継続して低温で特に出穂期にあたる七月二十六日～三十一日までの六日間の最低気温の平均は摂氏一三・三度で平年より五・七度も低く経過した。

日照時間も六月は七四%、七月九七%、八月七九%と平年以下であつた。

このように気象的には苗代期を除いては、恵れない気象条件のもとに経過したこのような気象条件のもとにおいてさえも、空前の豊作といわれた昭和三十年に次ぐ反収をあげ、また有史以来始めてという二百一万四千七百石（三十万二千二百トン）という収量をあげさせることのできた原因は何であろうか。

まず、あげられることは、昔のお天気まかせの稲作から完全に近いほど脱皮していることであろう。

育苗がなかば無理とあきらめられていた山間高冷地でも健苗の育成ができるようになり、良苗を適期に植付け得ることができ、また優良品種の導入、品種の選定の適正、施肥技術の向上、土地改良事業の推進、農業の機械化、病虫害防除技術の向上と徹底等々いまや何ものをも恐れることのない米づくりにまで進歩してきている。

ともあれ、恵れない気象のもとにおいてさえ、たいした病虫害の発生も見ることなく、また施肥技術の向上により倒伏も極めて少い面積にとゞまり、多年の念願であつた二百万石という大台を突破し

農協の倉庫にぞくぞく運ばれる新米

34.12月

得たことは、一人農業関係者のみならず県民すべての喜びであり、県勢進展の上からも特筆すべきことであろう。

（2）仙人有料道路の開通

待ちに待つた仙人トンネル有料道路は九月十二日、遂に完成した。

内陸部と沿岸部を結ぶ交通網の整備拡充は、本県の産業経済発展のための懸案事項として、多くの人々が永年その解決のために努力してきたが、この仙人有料道路の開通完成は、その努力が報いられた最大のものといえよう。

岩手県の沖合、つまり三陸沖は寒流と暖流の合流点となつており従つて魚種も暖流に乗つて回遊するマグロ、カツオ、イワシ、イカ、寒流に乗つて回遊するタラ、スケソ、サンマ等多種多様である。

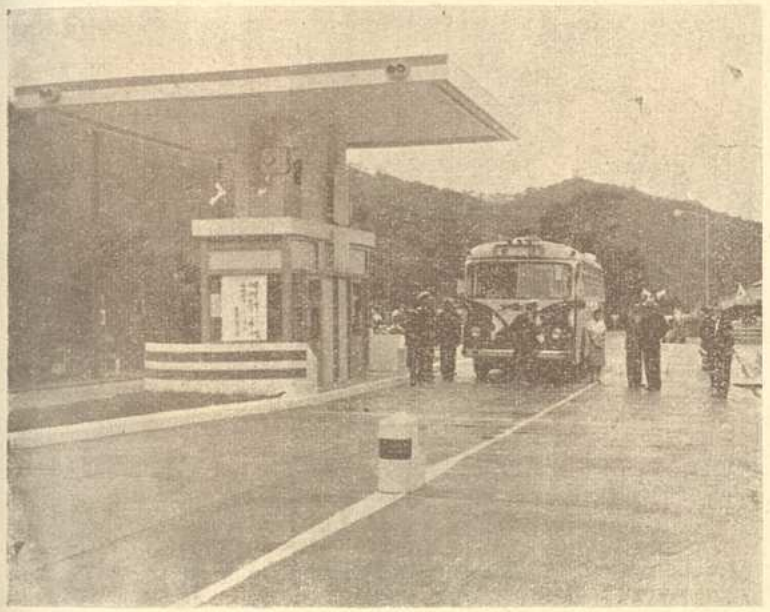
さらにわかめ、あわび等の地先漁業も日本一の魚獲をあげている。

こうした海の宝庫をひかえもつとともに、わが国有数の製鉄所をはじめ、各種の工場、鉱山をもつ沿岸地方の発展に最も大きな障害とされているものの一つに交通網の不備ということがあげられていた。

とくに、水揚された鮮魚は、一刻も早く消費都市の市場に出荷されることが、最大の条件であるが、この条件を満すには交通網を整備する必要があつた。

また内陸部から沿岸部に向ける野菜、食料品等々沿岸と内陸を結ぶ交通網の果す役割は非常に重要であるが、鉄道は東北本線の輸送力が限界にきているため、山田線釜石線の輸送力には大きな期待を寄せることができず、更に道路としても見るべきものがなかつた上に、冬期間の一～四月までは通行止めということになつていた。

このような交通施設を基調とする沿岸地方にとつてまた岩手県の発展にとつて、仙人トンネル有料道路の開通は唯一最大の希望となつていたケンをもつてた



仙人トンネル管理事務所附近

る標高八百八十米の仙人峠のドテッ腹をくりぬき内陸部と沿岸部を結ぶ最短の道路を建設しようという構想が県と日鉄鉱業KKによつて表明されたときは、多くの人々に「そんなことが……」という疑念をいだかせたのであつたが、しかし前にもふれたように内陸部と沿岸部を結ぶ交通網の果す役割とその現状を考えるとき、せがひでもこの道路を実現させたいという願がこめられ、具体的な路線決定にあたつては、日鉄鉱業の今井釜石鉱業所長の構想が検討され、トンネルの導坑掘さくは予定どうり、昭和二十七年の十一月に着工された。

この工事には鉱業所の全技術陣がアメリカから買入れた最新式のジャンボー、砂利積機などを駆使するとともに、優れた技術と周到なる計画のもとに工事が進められ一日八メートルも掘さくするという成果をあげ、我が国、土木建設業界を驚かせた。

こうして着工以来二年という短日月で延長二千五百米という当時としては日本一のトンネルが貫通し、二十九年の十月に貫通式をあげた。

その後県がひきつづき切拡げ工事、取付道路工事を行つてきたが一日も早く完成させる必要から道路整備特別措置法にもとずく貸付資金をもつて、東北では始めての有料道路事業として道路公団が工事を進めることになり、昭和三十三年一月から工事に着手した。

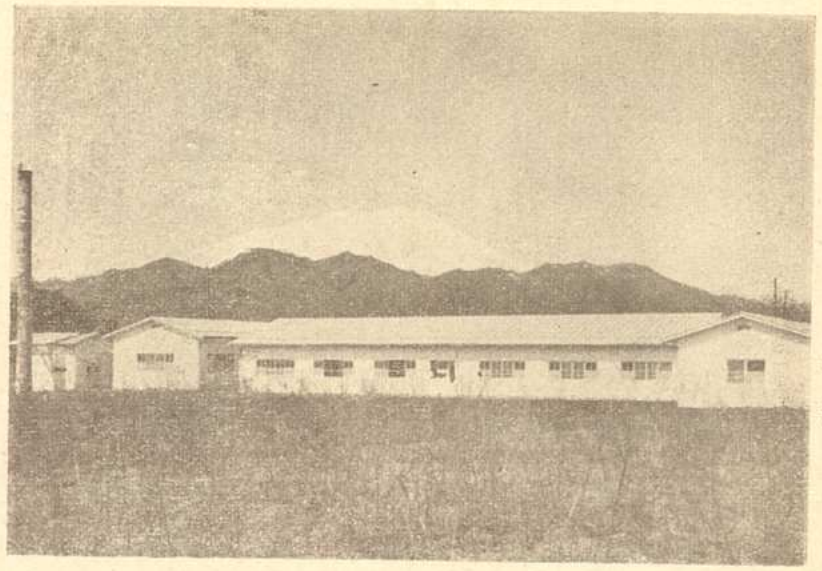
公団の行つた工事は、総延長一万百九十五米、うちトンネル二千五百二十八米（二ヵ所）橋梁百四十一米（四ヵ所）巾員六・五米、車道巾員五米で、この工事費は三億六千五百万円となつている。

昭和二十七年にトンネルの導坑掘さくに着工以来七ヵ年、総工費六億七千百万円を投じ「夢物語り」とまでいわれた仙人トンネル有料道路は立派に完成し、去

る九月十二日盛大な完成の式があげられた。

待望久しかつた、この道路の完成後は鮮魚を満載した大型トラックや、沿岸向けの生野菜を積んだトラック、国立公園を観賞するロマンスカー、ハイヤーなどが行き交い、当初予想していた一日平均の通過車輛数百九十台をはるかに上廻り、十一月中の一日平均通過車輛数は二百六十四台となつている。

ともあれ、この道路の完成は岩手の産業、経済、文化の発達に果す役割は、はかり知れないものがあることを考えあわせると県民ひとしく心から喜び合いたい。



みたけ学園の全景

（3）精薄施設 みたけ学園の開園

精薄児の収容施設としての〝みたけ学園〟が完成開園した。

あすの世代をになう子供たちを、身心ともに、すこやかに育てようということで、児童福祉の諸施策が強力にとられ諸種の施設が新設また整備拡充されているが、この精薄児収容施設〝みたけ学園〟の完成開園によつて、一応全部の児童福祉施設が整つた。

県内の精薄児の数は、小・中学校の児童二十三万人のうち約一万五千人と推定されているが、こうした児童に対する措置はほとんどとられていなかつたともいえる。

ただ最近は小・中学校に特殊学級を設ける学校がかなり多くなつてきているがこれらの特殊学級で教育を受ける児童は比較的知能指数の高いものだけであつて特殊学級に収容できない知能指数の低い子供は、ほとんど野ばなし状態であつた。

そこでこれらの児童を収容して指導し社会に対する適応性と自活できるような知識や技能を与え、これらの子供の不幸を少しでも少くしようというねらいのもとに設けられたのがこの施設である。

この施設は滝沢村滝沢穴口に総工費二千四百八十万円（うち国庫補助八百四十三万円）で昭和三十二年に着工し、第一期工事として女子寮舎、給食舎を昭和三十三年の三月に完成させ、ひきつづき第二期工事として男子寮舎、本館、指導舎ボイラー舎、職員舎、園長舎などを今年の三月に完成させ五月八日に開園式をあげた。

この施設へ入所できる児童は満三歳から十八歳までの軽度の痴愚、高度のろ鈍となつており、収容定員は五十名となつているが、現在収容されている児童は四十九名となつている。

学園の一日は、朝六時の起床に始り、体操や掃除のあと、七時には、そろつて食事をとり、九時から午前は二時間三十分、午後は一時間三十分の学習指導があり三時にはおやつもある。

そして夜は自分の持物を整理して七時には床につくという日課である。

学園の子供は普通の学校のように時間割を組んだり、また教科書による指導に重点を置くということでなしに、生活指導に重点がおかれ、その体験で物を覚えさせる方針をとつているため、子供達はほんとうに、のび〳〵と生活し、この子供達にありがちな人を恐れることもなくなり、活潑に物をいゝまた元気に遊んでいる。

この施設には僅か五十名しか収容できないが、収容されない子供達の、その日〳〵の暮し方が、収容されている子供達と同じ方向に進み、また収容されていない子供達の肉親を始め家族の人達の相談の場となるならば県下の精薄児に、そしてその肉親、家族に与える施設の価値は大きいものがあろう。

また〝みたけ学園〟は収容施設としてのみでなく、精薄児に対する社会の人々の理解を深める役割を果すことになるであろうことを考えると、その開園の意義は大きいといわねばならない。

(4) 徳田橋の着工

地元民多年の念願であつた徳田橋が架設されることになり、その起工式が去る十一月二日現地において盛大に行われた

この橋は北上川に架けられ、紫波郡矢巾村徳田と都南村乙部を結ぶもので、この橋が架けられることによつて一級国道四号線と県道盛岡大迫線が北上川をはさんで結ばれることになる。

このことは産業経済上極めて重要な意義をもつものであり、特に北上特定地域総合開発事業の推進上からも、また交通量の激増にともなう一級国道のバイパス線の一端としても誠に重要な意義をもつものである。

紫波郡下の北上川に架設されている橋梁の現況を見ると盛岡市の明治橋から日詰の紫波橋に至る約二十粁の間には橋梁が全然なく対岸との交通は渡船によつてのみ行われている状態であり、北上川に両断されているこれらの地域に幾多の不便をかけ産業文化の発展を著しく阻害しているので各方面から一日も早く着工されることが望まれていたものである。

橋は、長さ三百六十一米、巾六米、橋台二基、橋脚八基、という規模のもので総工費は一億六千万円となつている。

この工事に国庫補助事業として県が行うものであり経費は国が⅔、県が⅓負担となつている。

竣功予定は三十六年度となつている。

徳田橋起工式における小川副知事の鍬いれ

(5) 岩手総合職業訓練所の建設

過去の職業訓練は、どちらかというと就職するために必要な基礎技術を教えるに過ぎず、また各事業所内での訓練も昔の従弟制度の弊害を除くために始めたもので、いずれも有能な技能者の養成という目的からは遠いものであつたが、産業の近代化にともなつて、一人々々の職人、工員が高度の技能者となることが要求されてきている。

このような産業界の情勢から昭和三十三年七月に研修訓練を主な目的とした職業訓練法が施行になつた。

したがつて、今までの手職一辺倒の訓練から機械産業に重点をおく職業訓練に変つてきた。

その研修の場となるのが総合訓練所である。

この総合訓練所を岩手県に誘致する運動は県と花巻市によつて数年間にわたつて続けられていたがその努力が実を結び今年の一月中旬に正式に設置が決つたものである。

建設の場所は花巻市の天下田というところで、花巻から花巻温泉に向う途中の花巻グランド附近である。

工事は八月から始められ、十一月二十日に第一期工事が完成し、職員等の配置も決り明春の開所に備えている。

第一期工事として建設された建物は、実習場二棟、二百平方米（六十坪）でこれが完成すれば、明春四月には機械科二十名、電気機器科三十名、自動車整備科三十名、木工科三十名の計百十名を収容し修業年限二年で専門技術を教えることになつている。

第二期工事としては六百六十平方米（二百坪）の実習場が建設され、三十六年度から鈑金科三十名を募集し、さらに機械科を十名増募することになつている。

また第三期工事としては、三十六年度に本館、事務室、大講堂等を鉄筋三階建約一千三百二十平方米（四百坪）を建設して、この訓練所の全工事を完了することになつている。

全工事が完成した後の昭和三十八年度以降には、本県の特殊性を考慮に入れ、

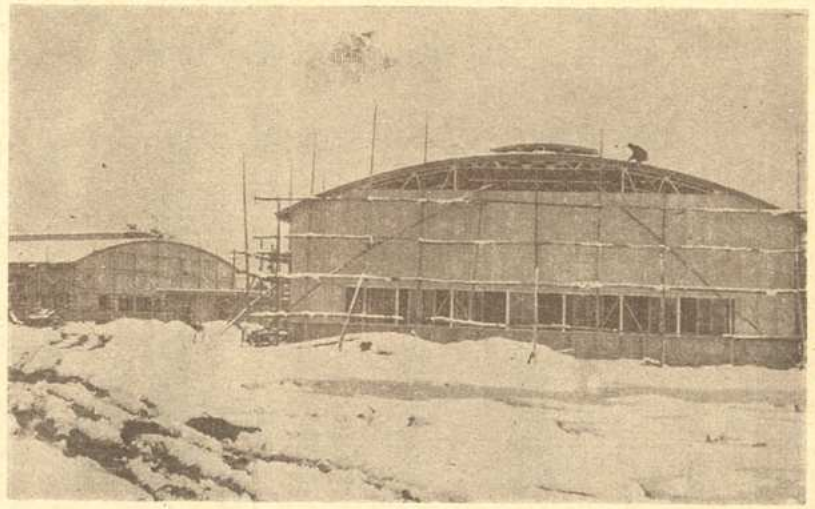
労務の需要に必要な科目を二種目程度増設する計画である。

本県の職業訓練所は、盛岡、盛岡婦人、花巻、水沢、一関、千厩、大船渡、二戸、宮古の九ヵ所で職種は大工が圧倒的に多く、そのほか木工、ブロックの建築工、農機具修理工、無線通信員、洋服工、洋裁工、タイプなどとなつていて、毎年四百八十名程度の青少年技能者を養成しているが、これをみても機械関係の訓練をする訓練所が少いことがわかる。

総合訓練所の第一期工事の完了する明年度には、宮古訓練所の洋裁科を漁船の内燃機関科に転換することなどを始め、県下の訓練所の整備統合が考えられている。

これは、これまで建築部門（大工）偏重の職業訓練機構は、電気、機械、金属等を網らした総合訓練所を中心として進められることになり、それに付ずいして建築、洋裁、事務、通信など各地域の求人需要の状況とにらみ合せ、特色を生かして運営されることになつている。

なおこの総合訓練所は、労働福祉事業団が失業保険の積立金、労災保険の積立金をもつて運営されることになつている。



建築中の総合職業訓練所

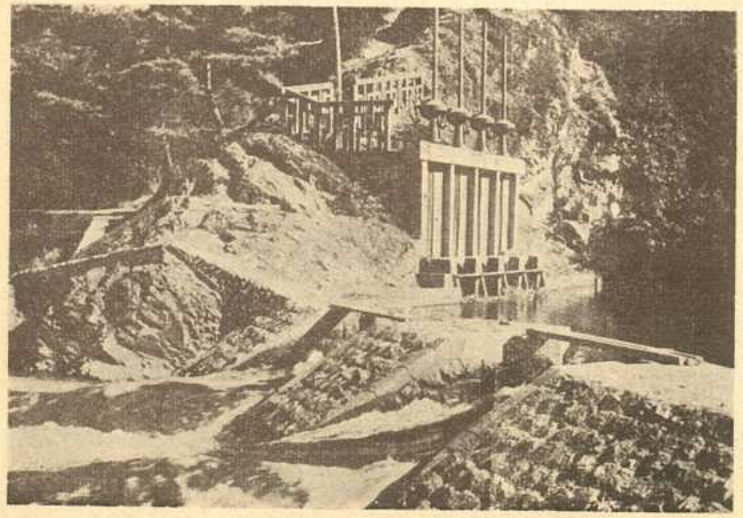
ともあれ、県勢の発展の中核をなすものは第二次産業の振興にあるといわれているときに、近代産業に欠くことのできない高度の技能者養成の施設がつくられることになつたことは、大きな喜びであり、また意義あることである。

(6) 雫石川農業水利事業国営として決定す

雫石川農業水利事業が国営事業として施行されることになつた。

この事業は、昭和二十八年から県営事業として行われていたものであるが、その事業量、事業内容等から見て国営として施行されることが適当であるということから今年の八月に国営として施行されることに決り、総工費十三億余円を投じて、昭和四十一年度までにこの工事を完成させることになつている。

事業の内容は盛岡市外、一町二ヵ村（紫波町、矢巾村、都南村）にわたる四千九百六十三㌶の水田及び畑の用排水の改良事業で、現在、この地域の水田の大部分は雫石川を主たる水源としており、取水地点の流域は六百六十平方粁に及び、渇水期であつても常に必要水量を取ることができるがこの水路は、用排水兼用になつているので、降雨の際は、この地域の山岳地帯から出る水を受ける排水路となつてしまう、しかしその水路の断面はせまい上に屈曲が多く、更に河床が高いために、流出水は溢流して、年々多くの耕地が流失、埋没、湛水等の被害を受けているので、この用排水不良の原因を根本的に改良して、米一千八百六十㌧（



雫石川からの取水地点となる鹿妻

一万二千石）の増収をはかろうというものである。

なぜこの事業が県営から国営に移つたのかというと、前にもふれたように、事業量、事業内容等から見て、その方が適当であるということであるが、具体的には、県営よりも事業費が多く投入されるということ、つまり、完成が早められるということと、工事費の県負担が少くてすむということなどの利点がある。

つまり、県営で行う場合の負担率の区分は、国が五十%、県が三十五%、地元が十五%となつており、これが国営になると、国が六十%、県が二十五%、地元が十五%となつて、県の負担率が十%少くなる。

しかし三十一年度から三十五度までは県が財政再建整備法の適用を受けているので、国が七十二%、地元が十五%、県が十三%の負担率となつている。

国営の事業種目は、ダム、頭首工、幹線用排水路などで、そのほかの支線水路等は従来どうり県営事業として行われることになつている。

国営事業としてのダムは、紫波郡矢巾村煙山につくられ洪水調節及び開田地（清水野）七十㌶の灌漑用水の役割を果させる。

ダムの規模は堤長五百米、堤高二十二米で貯水量は十四万四千百二十八立方米となつている。

この地域の山岳方面に降つた雨は大白沢川、岩崎川に流出してくるが、一度大雨になると川巾がせまいために、忽ち洪水となつて耕地を流失、埋没させるために煙山にダムを築いて降雨を貯留しておき逐次放水して耕地を守ろうというのである。

また、頭首工は、盛岡市太田鹿妻地内の雫石川につくられるもので、堤高三・六米、堤長九十八米で毎秒十六㌧の用水を取水するための施設である。

幹線用排水路工事としては、用水路四百二十八米（一億三千万円）用排水兼用水路である鹿妻本堰一万五千八十三米（五億八千万円）太田川一千百三十九米（八千五百万円）岩崎川一千五百米（三百万円）大白沢川二千百二十米（五百万円）を新設、補修、改修することになつている。

なおこの水路の計画はアイオン台風時の出水を基礎として設計されているのでよほどのことがない限り洪水を見ることがないとされている。

（7）北上川中流部河川改修の着工

県民待望の北上川中流部河川改修が国直轄事業として今年十一月から始められることになつた。

北上川は県の中央部を南下する東北地方第一の大河川である。

この川の源は、岩手郡岩手町御堂の七時雨山に発し、奥羽山脈と北上山脈から発する大小幾多の各支川を合せて宮城県石巻湾に注いでいる。

ところが、この北上川の流れは一関市の南、孤禅寺附近が河巾がせまく一定量の水しか流さないため、出水すると孤禅寺附近から上流一帯は水害に見舞われることがたび〳〵で、特に昭和二十二・三年に岩手県を襲つたカザリン、アイオンの両台風の際は甚大な被害を受けた。

そこで、この北上川本流における計画洪水量は、昭和二十二年九月の洪水量を基準として毎秒九千立方米とし、この計画洪水流量を孤禅寺において毎秒六千三百立方米（孤禅寺狭窄部を通過できる絶対流量）とし、岩手、宮城県境において狭窄部における流入量を加えて毎秒六千五百立方米に調節することとして洪水処理対策をたてた。

その対策としては、上流部においては北上川本流（四十四田ダム）雫石川（御所ダム）猿ヶ石川（田瀬ダム）和賀川（湯田ダム）胆沢川（石淵ダム）の五カ所に多目的ダムを構築するほか舞川に遊水地をもうけて、最大流量毎秒二千七百立方米の洪水調節をはかり、狭窄部に達する流水量を毎秒六千三百立方米に調節する計画がたてられるとともに、この計画に合せて、本流及び重要な支川の改修事業や流域の治山、砂防事業、気象業務施設を行うことが決められ、着々実施に移されていたが、中流部の河川改修だけは昭和二十九年十二月十四日に建設省の直轄施行区域に指定されていたにもかゝわらず、手がつけられていなかつたものだけに今度着工されることになつたことはこの地方の人々を始め、岩手県民にとつては、何よりの朗報である。

今年度の工事は六百五十万円の工費で

孤禅寺狭窄部

築堤百米と樋管一カ所を行うことになつている。

明年度からは本流の護岸三千八百二米本流及び砂鉄川の築堤一万七千六百四十五米、掘削百三十九万立方米、溢流堤千五百米、水門二カ所、樋管十三カ所と附帯工事として道路五千百十八米、水路九十七米、狭窄部掘削七十四万立方米を十二億九百五十万円で行うことになつている。

この工事を行うことによつて、水害の常習地といわれていた東磐井郡川崎村、一関市弥栄、藤沢町黄海、花泉町日形などの地域の水田六百五〆クタール、畑五百四十五〆クタール、その他七十六〆クタールの耕地を守ることができ、また住居千六百、工場四十なども水害から守ることができ、更にこの地域の人々一万二百人の生命をも守ることができる。

この工事は「百年河清を待つ」の諺のとおり、巨額の経費とともに長い年月をかけなければならないが、その効果を一日も早く期待し、またあえて諺にそむくためにも、今後予想される幾多の困難を県民こぞつて、のりこえて行くという決意が必要であろう。

ともあれ、長年の懸案であつたこの工事の着工は一九五九年の県民への贈物の最大のもの〻一つであろう。

（8）岩手放送テレビ局の開設

東北では、東北テレビに次ぐ民間テレビ局として、その開局が期待されていた〃岩手放送テレビ〃が九月一日県民注目のうちに開局した。

この〃岩手放送テレビ〃の開局によつて、さきに開局していたNHK盛岡テレビ局とともに県下の大部分の地域で、テレビが見られるようになり、岩手も名実ともにテレビ時代を迎えた。

本県でテレビが見られるようになつたのは、NHK仙台テレビ局が開局した昭和三十二年四月であつたが、このときは県南の一部の地方だけであつた。

その後東京〜仙台間のマイクロウエーブが札幌まで延長されることになり、県の中央部にあたる紫波町の新山がその中継所に選ばれた。

そこを中継基地としてNHK盛岡テレビ局の送信所が完成し、昭和三十三年十二月にテレビ電波を発射し、これによつて県内の大部分の地域でテレビが見られるようになつた。

岩手放送テレビ局も電波の到達条件が非常によいこの新山に、電々公社のマイクロ・ウエーブ中継所、NHK盛岡テレビ送信所と並んで建設されることになり、三十四年三月にその工事が始められた。

局舎は円形の鉄筋コンクリート二階建延四六九・二平方米（一四六・二坪）のスマートなもので、放送機械などを含めて約一億五千円の工費で完成している。

アンテナは六段スーパータンスタイルで高さは、建物を含めて五十三米、海抜では六百三米となつている。

このアンテナからは、映像出力一キロ音声出力七百五十ワットの電波が発射されている。

視聴地域は沿岸地方を除く県下全域と青森、秋田の一部となつている。

県内のテレビ台数は十月三十一日現在で一万二千六百台となつており宮城、福島に次いで東北では第三位の台数である

現代の社会の発展と生成はマス・コミの発達に負うところが大きく、この点マス・コミの鬼才児といわれるテレビの機能は高く評価されてよいのではないかと思われる。

とくに、本県のように、すべての点において、中央文化の伝播度が低い地方においては、これが県民生活の上に少なからずマイナスとなつてきているが、テレビ放送の開始によつて、地域がちゞまり中央文化の恩恵に、たゞちに浴することができ、東京に住むと岩手に住むとの差異は本質的に縮少されて行くと考えてよいのではないかと思われる。

このことは、本県の文化向上のためにも県民生活の向上のためにも、その効果は、はかり知れないものがあることを思うと、このテレビ局の開局は、さきに開局したNHKテレビ局とともに大きな意義をもつものといえよう。

紫波町新山に建つているテレビ送信所

（9）大釜崎ロラン局の開局

我が国で始めて建設されるロラン局が下閉伊郡山田町船越大釜崎に建設され十一月五日現地においてその完成式があげられた。

ロランというのは、ロング・レンゲ・ナビゲイション、エイヴの頭文字を合せたもので、日本語では遠距離航路標識ということであつて船舶や航空機が航行中に位置を見いだす施設である。

ロラン施設は三ツの局が一組となつて互に電波を発射し、この電波を船舶なり航空機なりが受けてその位置を知るというものである。

今度我が国に施設された三つの局というのは二つの局の中間に位する本県の大釜崎主局と北海道の落石、茨城県の波崎の二つの従局である。

この三つの局が一群となつてロラン電波網を日本の北太平洋海域一帯に張りめぐらしているので、北洋漁船やカツオ、マグロ船あるいは、捕げい船等の遠海漁船は航行だけでなく漁ろうのためにも、利用することができる。

ロラン方式は星や太陽の角度から位置を知る「天測」とくらべてどうなのかというと、まず、

①天候のいかんにかかわらず、また昼夜を問わず常に正確な船位が求められること、②船舶が正確に洋上で相遇できること、③正確に目的の漁場へ行けること、④船の燃料経済と操業時間が短縮できること、⑤遭難等にあつても位置を正確に知らせることができること、などがあげられている。

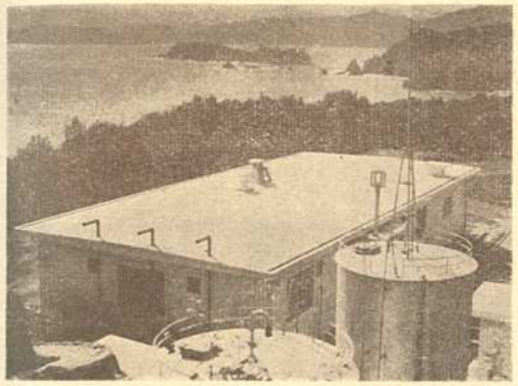
なおロラン施設の利点としては有効巨離範囲が広く、昼間は七百カイリ、夜間は一千四百カイリにも及んでいること。

また精度が高く普通は〇・五カイリ、条件の悪い時でも誤差が五カイリ程度であること、ロラン受信機の操作が簡単であること。普通二～三分、条件の悪い時でも十分以内という短時間で位置がはかれることなどがあげられている。

大釜崎ロラン局には森所長ほか十名の所員が昼夜兼行三交代で勤務している。

現在までの電波発射の成績は良好で多くの船舶に多大の利便を与えている。

この局の設置によつて、海運界の今後の発展が大いに期待されるところである



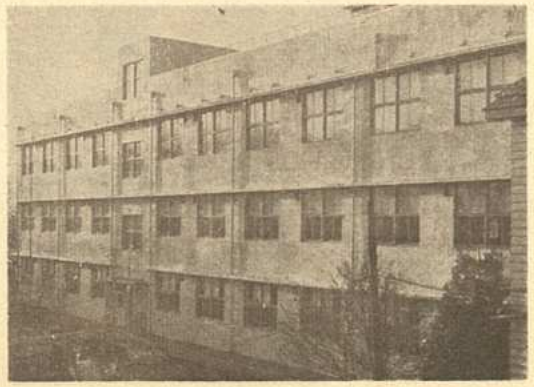
大釜崎ロラン局

（10）岩手大学に応用化学科設置

多年の念願であつた応用化学科が今年四月一日から岩手大学の工学部に新設された。

県是として進められている総合開発の推進は、資源開発のみならず人の開発、つまり有為な人材の輩出をともなわなければならないといわれ、とくに総合開発の中核となつている鉱工業の振興には、専門技術者の養成が必要欠くべからざるものであるとして、去る昭和三十三年七月阿部知事を会長とする〃岩手大学応用化学科設置期成会〃が結成され、岩手大学に応用化学科を新設する運動が開始せられた。

この運動は、県・市・民間団体が一体となつて強力に推進した結果でもあるがそれとともに、文部省、大蔵省等が設置の必要性を強く認めた結果でもあつて、その年の十二月三十日には、三十四年度設置を本決めにするというスピードぶりであつた。



完成した応用化学科の校舎

学科新設にあたつて申請した初年度に設置が許可になるということは異例のことで、全国的にもその例を見たことがない。

過去9年の県政ビッグデー

一九五〇年

1、北上川総合開発二大ダム着工
2、医療公営県立病院の発足
3、釜石線の開通
4、岩手開発鉄道の一部開通
5、国有牧野四万町歩解放
6、国有林解放請願の採択
7、釜石製鉄所の生産拡充
8、中尊寺の学術調査
9、盛岡鉄道管理局設置
10、食糧自給県となる

一九五一年

1、北上特定地域指定さる
2、主畜農業圏が確立する
3、県営グランド発足す
4、北岩手鉄道の計画なる
5、盛岡短期大学設立せらる
6、鉄道複線化着工せらる
7、十キロ放送の工事着手さる
8、商工館の事業開始せらる
9、松寿荘、和光学園、静和病院など社会福祉施設の飛躍的充実
10、山王海ダムの完成

一九五二年

1、「北上特定地域」国土総合開発の第一順位となる
2、電源開発始まる
3、オリンピック選手招待陸上競技大会ひらかる
4、大船渡市誕生す
5、鉄道建設促進さる
6、岩手丸の新造及び三漁港の修築起工さる
7、大規模農業開発事業促進さる
8、金融機関充実さる
9、食糧移出県となる
10、草地農業振興の対策進む

一九五三年

1、冷害におそわる
2、北奥羽地域開発計画概要なる
3、電源開発進む
4、国有林解放一万町歩達成す
5、ジャージー種導入せらる
6、ラジオ岩手発足す
7、石淵ダム完工と湯田ダムの着工
8、猿ケ石川沿岸農業水利事業の着工と山王海農業水利事業の完工
9、全国勤労者陸上競技大会開かる
10、パン食モデル県となる

一九五四年

1、両陛下御来県
2、国立公園「陸中海岸」国定公園「八幡平」の指定決る
3、山田線の復旧なる
4、新六市誕生
5、田瀬ダム完工す
6、北奥羽地域「調査地域」に指定さる
7、県有林造成四十ケ年計画着手す
8、仙人トンネル貫通と県道の着工
9、十二万農家十二万家畜単位確保す
10、日独陸上競技大会盛岡大会開かる

一九五五年

1、空前の大豊作
2、国民健康保険全県施行
3、東北本線の複線化三地区着工
4、セメント増産態勢なる
5、草地農業開発緒に着く（二戸高原の世界銀行調査ならびに集約酪農地域の指定）
6、全国第二位の銅産県となる（赤金、鷲合森、花輪線等）
7、さんまの大漁
8、県営発電の着工
9、労災病院、小児結核療養施設の設置決る
10、県機構の改革なる

一九五六年

1、県財政再建計画なる
2、八幡平国立公園に指定さる
3、岩洞ダム着工さる
4、町村合併計画九六％達成
5、農漁村振興対策樹立さる
6、酪農推進態勢大いに進む
7、宮古港の一万トン岸壁着工
8、製塩工場の設置決定
9、自衛隊の設置決る
10、国営たばこ試験地の設置決定

一九五七年

1、東北開発三法成立
2、北奥羽特定地域指定さる
3、県営発電着々進む（胆沢第二発電所の完成と岩洞第一、第二発電所の着工）
4、湯田ダム工事本格化
5、大船渡港一万トン岸壁着工
6、農業の機械化大いに進む
7、ウラン資源脚光をあびる
8、都南学園とみどり学園の開園
9、小本線の延長と生橋線の着工
10、盛岡電話局の完成（自動式電話開通）

一九五八年

1、北奥羽特定地域の開発計画閣議決定す
2、二戸高原開発着手す
3、干ばつと台風の災害を克服す
4、県立病院の利用者のべ三百万をこえる
5、国営たばこ試験場と東北林木育種場設置さる
6、誘致工場続々操業す
（イ）東北開発KK岩手セメント工場の落成
（ロ）東北製塩工業KK大船渡工場の落成
（ハ）東洋化成KK北上工場の落成
（ニ）PSコンクリートKK北上工場の落成
（ホ）東北ホモボードKK好摩工場の落成
7、永久橋への架替着々進む
8、イルカ漁業の転換なる
9、国保健全化対策打出す
10、出納事務所発足す

新設の工事は本年六月に工費二千二百万円で工学部本部建物の東側に鉄筋コンクリート二階校舎（教室二、実験室二、研究室八、天坪室一、光学室一、暗室一、図書室二、その他五、一千百五十五平方米（三百五十坪）の建設を始め、十二月中には完成する。

なおこの校舎建築の二千二百万円は全額応用化学科設置期成会の寄付によつてまかない、文部省からは基礎設備費として二千五百万円が四ヵ年にわつて配当されることになり、本年度の配当分は三百六十万円であつた。

講座は、無機工業化学関係、原料有機工業化学関係と合成有機工業関係、化学工業関係の四講座からなつているが、とくに各種資源の化学的高度利用に関する講座に重点がおかれることになつている

学生の募集定員は四十名となつており教授陣は教授四名、助教授四名、助手四名、その他の職員八名となつている。

ともあれ、資源の国といわれながら、その資源が高度に活用されることなく、素材のまゝ移出されていた本県の産業事情からして応用化学科の設置に期待するところ大であるといわなければならない

応用化学科をもつ大学は全国で四十一校を数えるが、その大部分は関東関西に集中し、東北では東北大学と山形大学だけに設置されているという状況であるので岩手の産業界の喜びだけでなしに秋田青森両県の産業界にとつても大きな喜びであるといえよう。